

府に願い出た。幕府はこれを承認した。

1808年秋、間宮林蔵は単独で樺太に渡って越冬した。1809年春、林蔵は樺太西海岸を北上して間宮海峡を渡りユーラシア大陸に到達した。林蔵は現地民族の案内でアムール川を遡り、中流域にあった清朝の仮府「デレン」に辿り着いた。詳しくは後で述べる。

デレンで林蔵は現地の清朝役人と筆談することでロシア情勢を把握して帰国の途についた。林蔵が後に口述した「東韃地方紀行」と「北夷分界余話」には当時の樺太やアムール川の状況や北方少数民族のことなどが詳細に記録されている。

有能な測量者でもあった林蔵は樺太全島の正確な地図を作製して幕府に提出した。この地図を入手したシーボルトは『MAMIYA NO SETO』としてヨーロッパの地図に掲載。樺太が島であることを紹介した。それまではサハリン島はユーラシア大陸の半島だと思われていた。宗谷海峡を発見したフランスのラ・ペルーズはじめ数々の探検家がこの地域を航海したがサハリンが島である実証はできなかった。林蔵が世界で初めて実証したのである。

1809年に間宮海峡が発見されてから200年の節目となる2009年8月、私は間宮海峡を旅した。稚内港からフェリーで宗谷海峡を渡ってサハリン州のゴルサコフ港に入った。ゴルサコフから西海岸を北上してトイク岬を目指した。トイク岬は林蔵がユーラシア大陸に渡ってアムール川中流域にあった清朝の仮府デレンを訪ねる拠点とした場所で、当時はノテト岬と呼称していた。

ノテト岬にはスメレンクル族（現在のニブフ）の一大集落があって、年に一度清朝の仮府があったデレンに出向き、1世帯当たり1枚のクロテンの毛皮を税として納めなければならなかった。林蔵は毛皮を納めるスメレンクルの族長一行に同行することでデレンに到達することができたのである。

私は土塵が渦巻くサハリンの道路を北上している。道は北へ行くほど困難になり、車はオフロード走行するラリーカーのように振動する。助手席に同乗した私の手のひらは汗だくになっていた。ドライバーも察知したのか「少し休み



北サハリンのヴィヤフトー村への道

ましよう」と車を止めた。車を降りると爽やかな空気に満ちて生き返ったような気分になった。ドライバーに誘われて道路わきの森に入った。そこはブルーベリーの木が群生して、どの木もたわわに実っていた。ブルーベリーの実はスーパーで売っているものよりひと回りほど大きくみずみずしかった。林蔵が東韃地方紀行で「木の実を食べて飢えをしのいだ」とあるのはブルーベリーもその一つであろう。

道は北サハリンのヴィヤフトー村で終わっている。トイク岬はヴィヤフトー村から30kmほど北にある。村から岬までは海上を行くしか

い。この日はヴィヤフトー村で宿泊することにした。エベンキ族の家に泊まることになった。エベンキ族は元々ユーラシア大陸の沿海州あたりに居住していた。帝政ロシア時代サハリンは流刑地となった。流刑地をルポルタージュしたチェーホフの「サハリン島」は不朽の名作である。冬になると間宮海峡は結氷して大陸と陸続きになる。サハリン島の囚人たちの多くが脱走を試みた。そこで猟師として腕の立つエベンキ族がサハリンに強制移住させられて脱走する囚人たちの監視をすることになった。普段はクロテンを狩猟して生活するが、脱走囚人を見つけると捕えて当局に差し出して多額の報酬を得た。彼らは脱走囚のことを隠語で『白テン』と呼んでいたとサハリンの博物館の説明にあった。当然、白テンはクロテンより高額な収入になる。宿泊したエベンキ族のお母さんが「トナカイ肉のボルシチ」と「チョウザメのウハー」を手作りしてくれた。素朴な塩味の料理はとても美味しく、満腹になってもおかわりしてしまった。



トナカイ肉のボルシチ

快晴の朝を迎えた。朝食のしたくをしているエベンキ族のお母さんに挨拶をすると「今日はヒロシマの日だね」と返事があった。サハリン

に来てすっかり忘れていたが今日は8月6日であった。お母さんありがとう、静かに黙とうした。

ヴィヤフトー村からトイク岬までは海路となる。村には港もなければ船もない。そこにあるのは水平線にユーラシア大陸を望み流木が打ち寄せられた砂の海岸だ。

早朝の海岸でガイドのワロージャが自慢のランドクルーザーからゴムの塊を取り出した。手押しポンプで空気を入れ始めた。ここでやっと察知した。ワロージャが船はあるから心配するなと言ったのはゴムボートのことだった。ワロージャが安いウオッカ1本で雇ったウイルタの男が額に汗して空気を入れている。横で見守る私は期待と不安が交錯する。トイク岬へは約3時間を要するという。天気が急変する間宮海峡、今は快晴だが天候が急変した場合はどうなるのかと不安がつるばかりだ。

ゴムボートが出来上がった。ワロージャは最高の船旅になると喜色満面だ。ここまで来たら行くという選択肢しかない。覚悟を決めてゴムボートに乗り込んだ。

小型エンジン付きのゴムボートは間宮海峡を快適に北上している。水平線には青いユーラシア大陸の山並みがアルプスのように見える。林蔵は樺太西海岸をスメレンクルが漕ぐサンタン舟で北上したと口述している。私は今、林蔵になった気分がゴムボートの中にある。林蔵も同じ景色を見たに違いないと思った。



ユーラシア大陸を望む間宮海峡をゴムボートで北上、トイク岬を目指す

海に大きく突き出た砂州が見えて来た。トイク岬だ。間もなくゴムボートはトイク岬の砂州に乗り上げた。目的地のトイク岬に到着した。そこは植物もまばらで、打ち上げられた流木が散らばる荒涼とした浜砂の大地が何処までも広がっていた。

林蔵が口述した「北夷分界余話」にはノテト岬（トイク岬）の図がある。今、私の眼前には200年前に林蔵が描いたノテト岬と同じ風景が広がっている。200年間時間が止まっていたかのようなのである。ただ違うのは現在人が住んでいないことだけだ。200年前林蔵がここを訪ねたときは、約60人のスメレンクル族が暮らしたと口述している。

林蔵はノテト岬に1か月以上滞在して大陸に

行く機会を模索していた。スメレンクルの族長コーニが清朝に朝貢するため大陸に渡るという情報を得た。林蔵は族長のコーニに同行を願い出たが拒否された。コーニは日本人を清朝の仮府デレンに連れて行くことで役人に咎められるのを恐れた。林蔵はこの機会を逃すわけにはいかない。そこでコーニの奥さんに口添えを頼むしかないと考えた。朝から夕方まで水汲みや薪集めなどに精を出したと口述している。

ついに大陸に渡る日が来た。コーニは奥さんの助言を受けて林蔵を同行させることに同意したのである。コーニを長として林蔵を含め8人を乗せた約9メートルのサンタン舟はアムール川中流域にあるデレンを目指してノテト岬を出航した。



カモメが群れ飛ぶトイク岬

一行8人は潮流に阻まれて日和見で停泊、舟を担いで山越えするなど苦勞して2週間後目的地であるデレンに着いたのであった。私は林蔵が大陸に渡る基点となったトイク岬に立つことができた。21世紀の現代でもここまでの道のりは遠かった。200年前ここまで到達して、さらに海峡を渡ってアムール川を遡った林蔵の体力と精神力の強さには驚嘆するしかなかった。そんなことを想像しながらトイク岬の周辺を歩き回った。

にわかに天候が急変して来た。今まで晴れ渡っていた空は雲に覆われて風が吹きはじめた。ガイドのワロージャはここで宿泊しようと提案して来た。食糧は3日分ある。テントも持参したし、熊に備えて猟銃もあると言う。明日の朝に天候は回復するのかと聞くと分からないとの返答。私の査証の期限は3日後である。私は今すぐに帰ることを提案、ワロージャは渋々同意して急いで帰路についた。

風が強くなって波が高くゴムボートの中に海水が入って来る。私はカメラ機材やパスポートなど重要なものを防水袋に入れて雨具で身を包んだ。途中まで来ると波がさらに高くなってゴムボートの小型エンジンが空中に跳ね上がって推進できなくなった。ワロージャはゴムボートから降りた。深さは腰ほどでしかなかった。ワロージャはボートのロープを引いて海中を歩いている。私はボートの中に入る海水を吐き出す作業に懸命となった。時々頭から海水を被り口の中にも入ってくる。不思議なことに海水なのに塩辛い。ほとんど真水なのだ。これはアムール川の水が大量に注いでいる証である。日がたっぷり暮れる頃、無事にヴィヤフトー村

の海岸に着いた。しばらくの間、ヴィヤフトーの海岸に寝そべて疲れを癒し、無地に戻ることが出来たことに感謝した。

ハバロフスクへ

2012年7月、私はアムール川を下る旅をした。経路は稚内から国際定期フェリー（2024年現在は休止中）でサハリンのコルサコフ港に渡り、ユジノサハリンスクからハバロフスクまで空路で行き、ハバロフスクから船でアムール川を下る。帰路はニコラエフスク空港から航空機でハバロフスクに戻るという計画だ。

ハバロフスクはアムール川とウスリー川の合流する要所にある。古くから満州族が暮らしていた土地であったが、1860年の北京条約により清朝から帝政ロシアに割譲された。アムール川とウスリー川が合流する地点には大ウスリー島（中国名：黒瞎島）という広大な中州がある。この島の領有をめぐる、ロシアと中国は長年にわたって国境紛争を繰り返してきた。2004年から国境画定交渉が行われた結果、2008年に両国が合意して国境線が確定した。詳しくは後で述べる。

この土地の中口国境画定合意まで148年間という長い年月を要している。



帝政ロシア時代の建物

ハバロフスク市は人口約58万人でロシア極東の中心地である。二つの大河の合流点のため河岸段丘が発達して坂道が多い。街の中心にあるレーニン広場からアムール川棧橋までの広い道路がアムールスキー通りだ。この通りを歩くと帝政ロシア時代の重厚感ある建物が目立って歴史の空気を感じさせてくれる。これに比べソ連時代の集合住宅などは薄っぺらで趣の欠片もない。

ハバロフスクは北緯48度28分（日本最北端は北緯45度32分）に位置して夏の最高気温は36℃、冬は最低気温零下41℃と寒暖差77℃という街だ。私が訪ねたときは気温が28℃ぐらいだが、湿度が80%を超えて蒸し暑く感じた。日本の最北の街で生まれ育った私の身体は完全に寒冷地仕様になっている。25℃以上に気温が上昇すると体力が激しく消耗する。私はアムールスキー通りを汗だくで往復した。

1917年のロシア革命でハバロフスクは反革命軍の拠点の一つとなった。1918年旧日本軍は反革命軍を支援するという目的でシベリア出兵。旧日本軍は1920年に撤退するまでハバロフスクを占領するという歴史があった。

戦後はシベリア抑留で多くの旧日本軍将兵がハバロフスク周辺でも強制労働させられた。故郷に帰ることなく、この地で没した人も多く、ハバロフスク郊外には日本人墓地がある。

かねてよりハバロフスクに行ったらグロデコフ記念郷土史博物館を訪ねようと楽しみにしていた。同博物館にはマンモスの骨格標本やアムール川沿いで暮らしていたナナイなど少数民族の資料などが豊富に展示されている。とくにシャーマンの資料展示は有名だ。ハバロフスクの街歩き最後はこの博物館で締めようと思っ

ていた。博物館前に到着すると展示物交換のためしばらく休館とあった。いつまでと表記されていないのがロシアらしい。

博物館はあきらかに近くにあるハバロフスク極東美術館を訪ねた。この美術館にはエルミターージュ美術館から寄贈された貴重な絵画も展示されている。館内は宗教画、帝政ロシア時代、ソ連時代などのコーナーがあり、充実した展示内容となっている。

その中で、ロシアの近代絵画を代表するイワン・アイヴァゾフスキーが描いた「波濤」が一番気に入った。私はその絵画の透明感、躍動感に目を奪われた。漁師の倅である私の心底には『海』があるからなのであろう。

この後、アムール川の地図を買い求めるため本屋を訪ねた。1軒目の本屋には思うような地図が無く、次の本屋を訪ねた。2件目の本屋には地図の品揃えが豊富で、アムール川の地図をはじめ3点の地図を買い求めることが出来た。

ハバロフスクの街を歩き回って少し疲れてきた。同行している通訳兼ガイドのインナに「お腹すいたね」と話すと「良い店があります」と案内された。

そこは「ハーレーダビッドソン」という名で店内には星条旗の小旗が装飾されていた。アメリカンスタイルの店の売り物は何とピザだ。ピザというイタリアンという既成概念は通じない。

ロシアに来てアメリカンスタイルの店でピザを食べるなんて不思議な感覚だとインナに話した。するとインナは「多くのロシア人はアメリカの文化が大好きなのよ、でもアメリカ人は好きじゃない」という。インナは大の日本好きで日本人も日本文化も全てがいいのだという。



そんなインナは熱心なロシア正教徒だ。以前にインナに連れられてユジノサハリンスクのロシア正教会のミサに参列したことがある。

その協会の建物は、日本が統治した樺太時代には樺太神社や護国神社などがあつた山裾の高台にある。金色に輝くたまねぎ型のドーム屋根はロシア正教会のシンボルになっている。中に入るとキリストや聖者が描かれた巨大なイコン（聖人画）が壁一面に飾られている。堂内はきらびやかで眩しく別世界だ。堂内に椅子はなく、皆立ったまま司祭が登壇するのを待っている。

やがて堂内の照明が落とされて、祭壇中央にスポットライトが浴びる。祭壇奥の扉が開くと法衣を纏った司祭が厳かに登壇する。その様子はまさにキリストの降臨を再現しているかのように見えた。

ロシア正教の根本にはテオーシス（人は神になることが出来る「神成」の思想があるという。（三浦清美著「ロシアの思考回路」扶桑社新書より）この精神がロシア人の血に脈々と流れていると思った。ロシア人の強靱さはここにあるのではないかと考える。



ロシア正教会（ユジノサハリンスク）

私はソ連崩壊直後にサハリンを訪ねた時を思い出した。マガジーン（雑貨店）に行っても商品はほとんどなく、棚の片隅にあるものは購入券を持参しなければ、いくらお金をだしても買うことができなかった。それでも市民はダーチャ（家庭菜園）で育てた野菜などを物々交換して不自由なく暮らしていた。公園ではバヤン（ロシア式アコーディオン）を演奏して歌い踊っている人もいた。

星条旗が飾られたハーレーダビッドソンでピザ（生地がとても厚い）を食べながら、ロシア人の不思議さと面白さを思った。明日はいよいよアムール川を下る。満腹感に浸ってホテルに戻った。

アムール川を下る

朝6時、ホテルのベッドで目を覚ますと、部屋は湿った空気で充満していた。窓のカーテン

を開けて外を見る。前日とは天候が変わって小雨交じりの強い風が吹いている。

ニコラエフスク・ナ・アムール行きは午前7時30分にハバロフスクの棧橋から出航する。私は慌てて身支度をして、朝食を済ませてホテルを出た。棧橋はハバロフスク市のメインストリートであるアムールスキー通りがアムール川に突き当たった所にある。

ハバロフスク棧橋に到着すると、アムール川海運会社が運行する旅客郵便船「メテオル」が横付けされていた。メテオルはロシア語で流星を意味するが、その名の通りの高速船だ。全長34.6mで定員124人の水中翼船は、ハバロフスクとニコラエフスク・ナ・アムール間の931kmを18時間で結んでいる。途中の棧橋11か所に立ち寄ることになっている。



ユーラシア大陸を望む間宮海峡をゴムボートで北上、トイク岬を目指す

この船は郵便船なので乗降客がいなくても必ず立ち寄る。平均時速60km以上の猛スピードでアムール川を下ることになる。

私はあらかじめ購入しておいた乗船チケットを係員に見せてメテオルに乗り込んだ。パスポートの提示を求められるかと思っていたが、そんなことは無くすんなりと乗船できた。

定刻の午前7時30分、メテオルはハバロフスクの棧橋を離れた。すごい！定刻通りだと思わず口にしてしまった。それまでロシアを旅行して鉄道、飛行機、バス、船などを利用したが定刻通りはほとんど無かった。一番ひどかったのはノボシビルスク空港でヤクーツク空港行きの



アムール川を走る高速船

飛行機を乗り継ぐのに10時間以上待たされたことがあった。説明は到着が遅れているからだけで、それ以上の説明はない。そこにはロシア人の乗客が大きな荷物を抱えて平気で待っている光景があった。

アムール川旅客郵便船「メテオル」は、ハバロフスクとニコラエフスク・ナ・アムール間を5月から10月まで週2回運行している。川が結氷する冬期間は運行されない。船内は家族連れや老夫婦などのロシア人でほぼ満席だ。見渡した限り外国人は私だけのようなのである。

私は今、アムール川の上にいる。アムール川を下りたいという長年の思いが実現した高揚感に浸っている。

アムール川の栄養豊かな水は、古くから多くの人々を流域に引き付けてきた。紀元前から古代人がこの川の水資源を暮らしの糧として来たのであろう。北海道で産出された黒曜石の石鏃が極東シベリアで発掘されたという研究報告がある。北海道の黒曜石がアムール川を渡ったのであろうと思われる。

江戸時代に珍重された蝦夷錦（清朝の官服）はアムール川を経由して間宮海峡を渡り、サハリンから蝦夷地（北海道）に渡って松前藩から幕府に献上されている。いわゆるサンタン交易の一つである。

アムール川流域では独自の経済文化も育まれた。2世紀から4世紀には肅慎（しゅくしん）、5世紀から7世紀ごろには靺鞨（まっかつ）が隆盛を誇った。その後はツングース系である女真（じょしん）が活躍した。女真は中国東北部からモンゴルにかけて勢力のあった遼（キタイ帝国）を従えて1115年に金王朝を樹立した。国名の由来は鍛えた鉄を意味する「遼」から錆びない「金」とした。

メテオルはアムール川を北上している。船の窓ガラス越しに見えるアムール川は茶褐色で荒

れている。そこに昨日の青いアムール川の姿は無い。川岸が霞んで見える。まるで大海原を航海しているかのようなのである。しばらくすると貨物船とすれ違った。貨物船は荒れるアムール川の茶褐色の波頭を切って進んでいる。



荒れるアムール川を航行するタンカー

アムール川では頻繁に中州を見る。中州は大小さまざまな、恒久的な中州もあれば直ぐに消えてしまう中州もあるようだ。

ハバロフスクの書店で買い求めたアムール川の地図を広げ。地図には航路が破線で示されている。地図を見るとアムール川がどれほど大きいか分かる。

地図の航路に従えばメテオルは中州を縫うように走っていることになる。川の兩岸の間にいくつもの中州が横たわって支流が複雑に流れている。私がアムール川で最も訪ねたい清朝の仮府



があった「デレン」も中州にあったようで、今はその跡形も見ることはいできない。ただ緯度経

度などから現在のノボイリノフカ付近といわれている。

ハバロフスクの南にはアムール川とウスリー川が交わる場所がある。その合流付近には巨大な中州が複数あって領有をめぐり中口が長年国境紛争を繰り返して来た。それが解決されたことは先に述べた。

『2004年10月14日、外交の世界に衝撃が走った。中国とロシアの間に領土紛争の懸案であった2島の帰属が最終決着した、というニュースがもたらされたのである。プーチンと胡錦濤の両首脳は、これを「歴史的勝利、双方の勝利」としてうたいあげ、これを解決困難としてきた諸国は、日本を含めショックを受けた。～中略～ではどのように解決されたのか。両国がとった「相互に受け入れ可能な妥協」とは「フィフティ・フィフティ」に分けるというものである』(岩下明裕著「中口国境秘話」より原文引用)

アムール川は相変わらず茶褐色の波を立てている。私はメテオルの船内を見て回ることにした。船内は大きく3つの区画に分かれている。船首部分には26の上等な客席があって、比較的エンジン音も小さく快適だが料金は高い。26席のうち空席が少しだけある。

船首客室から中央客室に行く途中に出入口のデッキが左右にある。中央客室には52の客席と売店がある。中央客室は満席だ。客室の右奥に小さな売店がある。品揃えは豊富で飲み物はもちろん、チョコレートなど菓子類、ピロシキ、ボルシチやブリヌイ（ロシア風クレープ）などの軽食も提供してくれる。私はここで中国製のカップ麺とブリヌイを買い求めて食べたが、まあいける味であった。

売店横の階段を上ってドアを開けると展望デッキに出る。デッキではロシア人の愛煙家が盛んに紫煙をあげている。どうやらここはメテオルの喫煙コーナーらしい。デッキを降りて後部に進むとトイレがある。その奥が後部客室で46の座席がある。ここも満席だ。

風が少しおさまってきたようだ。私は展望デッキからアムール川を眺めることにした。アムール川は中国では「黒水」とか「黒竜江」と呼ばれてきた。満州語ではサハリアン・ウラ（黒い河）といい、モンゴル語ではハラムレンと呼ばれてこれがロシア語のアムールになったようである。

アムール川流域とその周辺には数多くの北方少数民族が暮らして来た。そして今も暮らしている。ニブフ、ウイльта、ナナイなどが詳細は専門家でなければ分からない。その呼び方も様々で例えば、ニブフはロシア語でギリヤーク、中国の中世では吉里迷（ギリミ）近代では魚皮韃子（ユーピーターズ）、アイヌ語ではスメレンクル又はニクブンと呼んでいた。日本はどうかというの間宮林蔵は北夷分解余話でスメレンクルと記述している。松浦武四郎は北蝦夷余誌でニクブンと記述している。現在はニブフで統一されている。

ウイльтаやナナイについても国や地域で様々な呼び方があった。

黒澤明監督の映画「デルス・ウザーラ」を思い出した。主人公のデルス・ウザーラは先住民ゴリド（ナナイ）である。ロシアの探検家ウラジミール・アルセニエフが極東沿海地方をデルス・ウザーラの案内で探検した時の記録である。

映画の中でデルス・ウザーラがロシア人のア

ルセニエフに語る言葉がある「この森は誰のものでもない。みんなのものだ」そして山小屋にわずかな食糧を置いて立ち去る。ロシア人は大事な食糧を何故残していくのかとデルス・ウザーラに問う。彼はつぎにここを訪ねる人のためだと言う。アルセニエフは獣に食べられるのではないかと返す。デルス・ウザーラは獣だって我々の仲間さと高笑いして山小屋を離れる。

探検家ウラジミール・アルセニエフを記念したアルセニエフ極東歴史・沿海地方国立博物館



現役クロテン猟師のウイльта族のサーシャ
(北サハリンにて)

がウラジオストクの中心部にある。沿海地方の自然や歴史が豊富に展示されている。明治時代ウラジオストクに進出した日本人の資料も展示されている。

ロシア人がアムール川に進出して領土としたのは、長い歴史からみると最近のことである。

なぜ帝政ロシアが極東進出にこだわったのか、様々な要因が複雑に絡み合った結果であったに違いない。その中でも最大の要因は毛皮であるとされている。帝政ロシアでは最大の収入源のひとつがヨーロッパへの毛皮輸出であった。当時、パリの社交界ではクロテンの毛皮に魅了された貴婦人が、その華麗さを競っていた。ロシア皇帝はコサックや毛皮商人に1枚でも多くの

毛皮を手に入れるように命じていた。歴史に「もし」はないけれど、パリの貴婦人たちが毛皮の魔性から解放たれていたら、ロシアの極東進出は無かったと想像する。

そんなことを考えてデッキにもたれていると、目の前に大きな橋が見えて来た。バム鉄道のアムール川鉄橋である。正式にはバイカル・アムール鉄道で第2シベリア鉄道とも呼ばれている。バム鉄道は日本海沿岸のソヴィエツカヤ・ガバニ駅からバイカル湖の北を通して、イルクーツク州タイシェット駅を結ぶ総延長4,324kmの世界有数の長大線路だ。この鉄路は1938年に着工されて2012年にトンネルや鉄橋を含め全線完成した。実に70年以上の歳月を要していても改良工事が行われている。



バム鉄道の建設にはソ連時代のコムソモール（共産主義青年同盟）の活動があつてのことだと言われている。1970年代「BAM」と書かれたユニフォーム姿の学生が夏休み返上でシベリアの大地に集まった。ソ連時代の若い力が結集された作品の一つがバム鉄道なのだ。

メテオルはアムール川沿いでは一番大きな都市であるコムソモリスク・ナ・アムーレの棧橋に到着した。人口は約28万人の工業都市だ。

都市の名前はコムソモール（共産主義青年同盟）を意味している。1931年の夏にソ連共産党の若者たちを乗せた船が辿り着いた場所である。そして、この広大な原野に工業都市の建設が始まった。製鉄所、造船所、航空機製造所などの軍需産業都市を若者たちの手でつくったのである。ソ連の有名な戦闘機「スホーイ」もここで製造されている。ソ連からロシアにかわっても一大軍需産業都市である。

コムソモリスク・ナ・アムール川での停船時間は10分しかない。下船して街を歩けないのが残念だ。川沿いの造船所には鉄錆びた旧式のドックヤードが見えている。奥の方には工業都市を象徴するかのように高い煙突が立ち並んでいる。メテオルは慌ただしく棧橋を離れた。

風がおさまって、少し青空が見えてきた。時刻はもうすぐ午後3時になろうとしている。ハバロフスクの棧橋を離れてから7時間以上経過している。私が最も見たかった「デレン」のあった場所は近づいている。私は再び愛煙家でひしめく展望デッキへ向かった。

間宮林蔵について

日本人で初めてアムール川を上り、そして下ったのは間宮林蔵だ。もちろん、それ以前にも鎌倉時代に日蓮宗を海外布教しようとした日持上人は蝦夷地を経由してアムール川を上り北京近郊まで到達したという話など、多くの日本人がアムール川を行き来したと思われるが、歴史上の記録に残るのは間宮林蔵が最初である。

鎖国を国是としていた江戸時代に、幕命で海外を視察した稀な幕府役人こそ間宮林蔵その人であり、その最終到達地がデレンであった。

間宮林蔵は1780年常陸国筑波郡上平柳村、

現在の茨城県つくばみらい市の農家に生まれた。筑波郡は幕府の直轄地で豊饒な土地に恵まれていた。しかし農民は毎年のように小貝川の氾濫で悩まされていた。このため幕府は、灌漑の堰を築く土木工事を行っていた。これが難工事であり、幕府の普請方役人をいつも悩ませていた。

これを見ていた14歳の林蔵は、水流を測り、土量を算出して幕府の役人に進言した。困っていた役人は進言を受け入れて工事を行ったところ、見事に完成したという逸話が地元には伝えられている。林蔵がこうした知識をどこで学んだのかは不明だ。林蔵の才能を見込んだ幕府の役人は、江戸に連れて行き幕府の下級官吏とした。

間宮林蔵とは、明晰な頭脳と頑強な肉体、さらに不屈な精神力が具わっている傑出した人物であったと想像する。林蔵は江戸で測量技術を



サハリンを見つめて宗谷岬に立つ間宮林蔵像

学んだ。自宅から天文方の役所までの歩数が毎日同じであったという逸話がある。

林蔵は測量技師として伊能忠敬の日本地図作成チームの一員として参加、伊能全図の完成に大きな貢献をしている。とくに蝦夷地や千島、

樺太などは林蔵が中心となって作成された。林蔵の生家はつくばみらい市に保存されていて、隣には間宮林蔵記念館があって足跡や遺品などが展示されている。

18世紀のロシアは毛皮を求めて東進したことは先に述べた。その勢力範囲は太平洋を越えて北米大陸にまで及んだ。毛皮貿易はロシア皇帝が国策としてつくった露米会社が全ての権益を持っていた。この露米会社の総支配人がニコライ・レザノフである。

レザノフは下級貴族であったが、5か国語をあやつる才能と機微を得た立ち回りで頭角をあらわした。皇帝の信頼を得たレザノフは外交官としても活躍した。

カムチャッカ半島からアラスカでラッコなどの毛皮採取をするロシアにとって、物資などの補給基地の確保が最大の課題であった。そこでレザノフは1804年長崎に来航して江戸幕府に通商を迫った。ロシアは1792年にシベリア総督の信書を携えたアダム・ラクスマンを根室に派遣している。このとき幕府は信書を受理せず、通商要求については長崎に回航するようにと幕府の信牌（入港許可証）渡していた。レザノフはこの信牌を持って長崎に現れたのであった。

このとき幕府の代表としてレザノフとの交渉にあたったのは長崎奉行の遠山景普（テレビドラマのモデルになった「遠山の金さん」の父親）である。幕府はレザノフ一行を長崎港で半年間ほど幽閉に近い状態で隔離した。その結果、江戸幕府はレザノフが要求する通商を拒否した。レザノフは納得のすることなく長崎の港を後にした。

レザノフの心情を十分に汲み取った部下のフヴォストフは、樺太や択捉などで日本人の居留

地を砲撃する事件を起こした。これが1806年の文化露寇事件である。なお、レザノフは航海中に客死している。

このとき間宮林蔵は択捉島の幕府の会所にいた。択捉島の幕府会所はフヴォストフ一行の砲撃を受けてほぼ全滅した。林蔵は九死に一生を得て函館に戻った。北方警備に不安を感じた幕府は、津軽藩、南部藩、秋田藩など東北地方の各藩に宗谷や斜里など北方警備の要所に蝦夷地警護の出兵を命じた。動員された藩士の合計は数千人に及んだ。

とくに会津藩は徳川家親藩ということで、樺太、宗谷、利尻島など一番気象条件の厳しい場所に派遣させられることになった。1808年1



稚内市宗谷の歴史公園内にある旧藩士の墓

月会津藩は、軍将家老内藤源助信周、陣将家老北原采女光裕をはじめ1,633名の藩士を派遣した。約1年後に帰還するのだが、50名の藩士が寒さなどで北の地で病没した。今も宗谷岬などには会津藩士の墓があって地元の皆さんが手厚く守っている。

文化露寇事件はロシア皇帝が命じたものではなく、一人のロシア人の感情によったものであったが、幕府はロシアの南下政策に脅威を感じていた。そこでロシアの情勢を探るために派遣されたのが松田伝十郎と間宮林蔵であった。

松田伝十郎には一つの逸話がある。伝十郎が樺太に詰めていた際、樺太アイヌが多額の借財で苦勞していることを耳にした。樺太アイヌはアムール川に暮らす山丹人（ナナイ）と交易していたが、その内容が極めて不平等であった。伝十郎は山丹人と会って直接交渉した。過去の借財は帳消しにして今後は平等な交易をすることを約束させた。樺太アイヌは伝十郎を神様のように尊敬したと言われている。

1808年3月、松田伝十郎と間宮林蔵の二人はロシア情勢を見極めるため樺太北部の調査に派遣されたことは先に述べた。ここで間宮林蔵の樺太探検について記述する。樺太の南端に近い幕府の会所があった白主に到着した二人は、樺太の西海岸と東海岸に分かれて調査することとした。伝十郎は西海岸、林蔵は東海岸とした。

東海岸を北上した林蔵はテルペニア岬（北知

床岬）に到達したが、波が荒くこれ以上の北上は困難と判断して島を横断して西海岸に向かうことにした。テルペニア岬は1643年にオランダの探検家ド・フリースが発見した。ド・フリースは黄金の島を求めて極東を航海し困難のすえに見つけたこの岬を「オランダ語で忍耐岬」と命名、これが英語表記でテルペニアとなった。樺太時代は非常に厳しい気候風土から「真の地の果て」北知床岬と呼ばれた。

アイヌの従者に舟を担がせて樺太島の最狭部約30kmを横断した林蔵は、西海岸を調査する伝十郎と合流した。伝十郎は既に西海岸北部のナツコを訪ねた結果、これから先は対岸が広がって見えることから樺太が島であると推測する旨を林蔵に伝えた。林蔵は心の中で確たる証ではないと思っていた。



真の地の果て「北知床岬（テルペニア岬）」
樺太時代の灯台が今も立っている（2018.9撮影）

伝十郎は、樺太が島であることが確認できた、季節も夏が過ぎ間もなく秋がやって来る、宗谷に戻ることを決断した。林蔵は不満であったが上司である伝十郎の命に従うことにした。宗谷に戻った林蔵は、ロシアの情勢を十分に見聞出

来なかったとして再度の樺太渡航を函館奉行に申し出た。林蔵の申し出は認められて引き返すように樺太に渡った。季節は既に秋深く、小雪も散らついていた。このことも既に述べた。



間宮林蔵樺太探検地図（当時の地名）

当時の日本人にとって樺太の冬は想像を絶するほど厳しかった。幕府の樺太白主の会所も冬期間は閉鎖した。米を主食とする者にとって野菜が全く手に入らない冬はビタミン不足で病気になり、最悪の場合死に直面する。

林蔵は樺太で越冬する際、食事を現地のアイヌやスメレンクル（ニブフ）と同じようにした。このことで病気をすることなく樺太で春を迎えることができた。私はここが林蔵の凄さだと思う。普段は米食をしている者がアザラシや熊の肉を主食として胃袋が堪えるのであろうか。林蔵は身体の芯まで頑強に生まれついたらしく思えない。

1809年3月雪解けを待たずして林蔵は越冬地である樺太のトンナイを出発した。

林蔵は従者のアイヌが漕ぐ舟で順調に北上し

て、3月の中旬には樺太北部のウショロに着いた。ここで問題が起こった。従者のアイヌがこれ以上北には行かないと言い出した。ここから北はスメレンクル（ニブフ）の土地で、自分たちが行くと侵入者になるとの理屈だ。ここには目には見えない境界があったのだ。

困り果てた林蔵は、ウショロで新たな従者を探すこととした。新しいアイヌの従者を雇った林蔵は5月中旬ノテトに辿り着いた。ノテトにはスメレンクルの集落があって60人ほどが暮らしていた。この時期、ノテトから北は海が結氷しているため舟を進めることができない。林蔵はノテトのスメレンクル集落に滞在して海明けを待った。

6月中旬、海明けの日がきた。林蔵は樺太が島であることを確認するため北上した。5軒のスメレンクルが暮らす集落ナニヤーに到着した。スメレンクルはこれ以上北には暮らしていないと言う。林蔵は海流を確かめた。間違いなく北に向かって流れている。このことはここが海峡である何よりの証拠だ。

林蔵は樺太が島であることを実証して、精密な樺太地図を作製した。この地図は幕府に献上されて最高機密扱いとなった。



ナニヤー（現在のルプロワ村）に立つ
間宮林蔵頭彰碑

林蔵が作成した樺太地図が幕府の外に出た。長崎に滞在していたシーボルトはこの地図を手にしてヨーロッパへと出航した。これが「シーボルト事件」である。

ナニヤーからノテトに戻った林蔵は、何とかこの海を渡る方法はないものかと思案していた。そんな時に、ノテトの酋長コーニが清朝に朝貢する毛皮を持って大陸に出向くという話を聞いた。

林蔵はコーニに同行を懇願した。コーニは日本人を連れて行くと清朝の役人が不審に思うのを恐れて断った。

スメレンクルはどちらかと言うと女性上位の社会であった。林蔵は酋長コーニの奥さんを取り込むことで同行の承諾を得ようと考えた。それから1月ほど毎日水汲みや薪拾いなどコーニの奥さんの手伝いをして過ごした。そうしているとコーニの奥さんは夫である酋長に、この日本人を同行するように口添えが行われた。妻の進言を無にできないコーニは林蔵の同行をししぶ承諾した。

1809年8月、酋長コーニを長として林蔵を含めた一行8人を乗せたサンタン舟（東韃地方紀行では5尋余り＝約9m＝と記述）がノテトを出航した。しかし風や潮流が悪く航海は困難に直面した。やっとの思いで大陸の止宿地であるムシボーに着いた。

ムシボーで舟から全ての荷物を下ろした。ムシボーから小さな川のあるタバマチーまでは山越えをしなければならない。林蔵も含めた8人はムシボーから舟を曳いて約20町（2.18km）の山路を越えたと記録にある。タバマチーからの小川はキチー湖（キジ湖）に繋がっている。ここで林蔵が止宿していた時にサンタン（ナナイ）人襲われたとの記述がある。

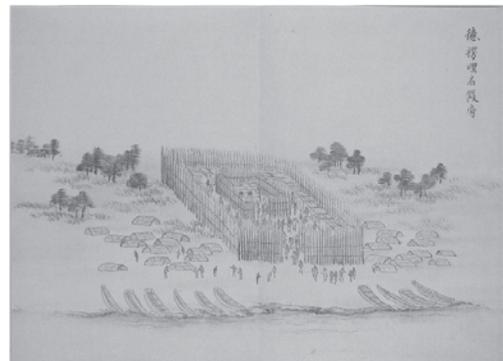
キチー湖からは順調にアムール川を上り8月中旬に清朝の仮府があるデレンに着いた。これらの事は「まず、サハリンへ」で述べ重複するが、ここで詳しく記述した。

清朝のアムール川仮府があったデレン

さて、林蔵がたどり着いたデレンとはどのような所なのであろうか。清朝がアムール川流域やその周辺に暮らす諸民族から貢物を受け取り、褒美を与えるために夏の間だけ臨時に置いた役所である。貢物は毛皮がほとんどで、その見返りとして反物などを受け取る。諸民族にとっては、いわゆる倍返しというメリットがある。清朝にとっては彼らが中国に従属していることを確認する場でもあった。

アムール川流域に暮らす諸民族にとってデレンは、朝貢するだけでなく、年に一度集まった人々が物々交換して、様々な情報を得る重要な場所でもあった。

林蔵はロシアの情勢を探るため清朝の官吏と直接交渉をした。漢字を読み書きする林蔵に清朝の官吏は驚いたという。筆談の中でロシアの



デレンの図（北夷分界余話より抜粋）

事を尋ねると、清朝の官吏はロシアが中国の属国であるとだけ答えた。林蔵はこれ以上尋ねることはしなかった。

デレンに7日間滞在した林蔵は、スメレンクルの酋長コーニ一行と共に帰路についた。帰りは流れに沿って下ることになる。往路の山路越えはせず、河口まで下ることにした。

一行はアムール川がアムグン川と合流して、大きく蛇行するサンタンコエ（現在のティル）を通過した。このとき林蔵は山の上に立つ二つの石碑を見た。同行しているスメレンクルたちは石碑に拝礼したと記述している。

一行の航海にはその後も紆余曲折があったが、9月中頃にはノテトに無事帰ることができた。林蔵はノテトのスメレンクル集落に別れを告げて帰路についた。11月上旬宗谷に着いた林蔵は、日記を元にして樺太探検の報告書を纏めて翌年幕府に提出した。

後に間宮林蔵が口述して村上貞助がまとめて後世に残されたのが「東韃地方紀行」と図説の

「北夷分界余話」である。

私は展望デッキでアムール川を眺めている。手元の緯度計を見た北緯51度15分だ。デレンは近い。現在のノボイリノフカ付近がデレンのあった場所と推定されている。メテオルはノボイリノフカには停泊しない。私はノボイリノフカを少し過ぎた付近で、林蔵が北夷分界余話に口述した「デレンの図」を思わせる風景に遭遇した。私は勝手にここだと決めてカメラのシャッターを押した。風はおさまったが、赤茶色の水が流れ、青黒い雲が空を覆っている。私は一瞬、岸辺に多数のサンタン舟が並びナナイやニブフなどの人々で賑わう幻を見た。メテオルのデッキでタイムスリップしたに違いないと思った。



デレンがあったと言われているノボイリノフカ付近

アムール川とアムグン川が合流する要所ティル

私が船室に戻ってうとうとしているとメテオルのエンジンが急に停止した。慌ててデッキに出るとメテオルは給油中であつた。川の真ん中にタンカーが停泊していてメテオルに給油している。アムール川のガソリンスタンドであ

る。今更ながら大河であることを思い知らされた。ふと川面を見るとアザラシが顔を出している。淡水に生息するバイカルアザラシだ。

給油を終えたメテオルは快適に走り出した。時計は午後6時を過ぎている。青黒い雲も薄くなって時々陽を射すようになった。

メテオルは夕陽を浴びてシュメールマノフカ、ソフィアスコエ、バイカリング、サビエンスコエ、ボゴドロスコエ、スサニノの各棧橋に停泊してティルに着いたのは午後10時を過ぎていた。外は暗闇かと思いきや夕映えが残っている。高緯度地域の夏は白夜に近い。

ティルのことについて触れたい。ティルはアムール川の要所で間宮林蔵は東韃地方紀行でサンタンコエと記述している。中国の歴代王朝はヌルガンと呼んできた。

13世紀、元朝の時代ヌルガンに東征元帥府を置いた。元はヌルガンを拠点としてアムール川の流域及びサハリンを制圧した。元史によると1264年、1284年と1285年の3度にわたってサハリンのアイヌを攻撃している。攻撃理由はサハリンの吉里迷（ニブフ）から骨鬼（アイヌ）が境界を犯すので助けてほしいとの申し出によるとされている。アイヌはサハリンの南端まで追い詰められた。サハリン南端のクリリオン岬の近くには、元軍が築いたといわれるシラヌシ土城跡が残されている。これらの事々を北の元寇と呼ばれている。

元寇で有名な文永の役（1274年）と弘安の役（1281年）は同じ時代になる。このとき元軍は日本列島の九州と北海道を挟み撃ちしたことになる。

林蔵がティル（サンタンコエ）で見た山の上の二基の石碑についてである。これは永寧寺の碑で明朝のときに立てられたものである。その碑文の要点は、多くの異民族が明朝の皇帝に朝拝するため、山を越え、海を渡って臣下の礼をとっている。ここに雑居している野人（ニブフ



ウラジオストクの博物館で展示されている永寧寺の碑などは朝廷に帰服することを望んでいるが、未だ入京していない。そこで1411年春に宦官のイシハラを派遣して永寧寺を建立して郡司（行政府）を置いたとある。これで林蔵が不思議に思ったスメレンクルの拝礼する理由がわかる。

この石碑今はティルに無い。帝政ロシア時代に二基の石碑はウラジオストクにある国立のアルセニエフ歴史博物館に移された。同博物館の1階展示室には永寧寺の石碑として常設展示されている。

ティルを出航したメテオルは、漆黒のアムール川を快走している。私は夜のアムール川を見たいと思った。デッキに立ってしばらくすると暗闇の中にホタルのような灯りが見えて来た。寄港地のタクスタだ。次にイノケンチェフカの棧橋に停泊して最終目的地であるニコラエフスク・ナ・アムーレの棧橋に着いた。時刻は午前0時50分、深夜のニコラエフスク・ナ・アムーレの街は静まり、風は無い。少しだけ冷たい心

地よい空気が出迎えてくれた。宿泊予約をしているホテルへと急いだ。

アムール河口の街ニコラエフスク

チェーホフの有名なルポルタージュ『サハリン島』の出だしは、「1890年7月5日、私は汽船で、わが祖国の極東の地点であるニコラエフスク市に到着した」で始まる。

ニコラエフスク・ナ・アムールはロシア極東の古くからの街で、かつては沿海州の州都で帝政ロシア軍の極東軍事拠点が置かれていた。その後ウラジオストクがロシア領となったことで、ロシア軍の拠点が移されたことですっかり寂れてしまった。そんなニコラエフスクを活気ある街にしたのは日本人だという。



アムール川に面したニコラエフスク・ナ・アムールの街

午前7時、私はホテルセイピエルのベッドで目を覚ました。窓のカーテンを開けると雲一つない真っ青な空が広がっている。空の青は何処までも深く吸い込まれそうだ。身支度を整えてホテル2階のレストランでブリヌイ（ロシア風クレープ）とチャイ（紅茶）で軽い朝食をとった。

私はホテルを出てニコラエフスクの街を歩いた。北緯53度のニコラエフスクは緯度的にはツンドラ地帯に入る。高緯度だが白樺などの街路樹が豊かだ。街の中心部近くにある博物館を訪ねた。博物館のエレーナ館長はニコラエフスク音楽学校の校長でもある。

エレーナさんは稚内観光協会が2010年から2019年まで冬季（1ヶ月）開催したサハリンアンサンブルの代表として稚内に滞在していた。私はその時に知り合った。エレーナ館長には博物館を訪ねる旨を事前に連絡しておいた。博物館に入るとエレーナ館長が出迎えてくれた。館内は自然・博物・歴史・民族などのコーナーごとに見やすく展示されている。ロシア極東やサハリンを旅していて感心するのは小さな村にも必ず博物館があることだ。エレーナ館長は「日本人に関するものがいっぱい展示してありますよ」と私を歴史コーナーに案内した。

1890年代に入りニコラエフスクの漁業が注目され、多くの日本人が鮭漁に従事するようになった。中でも小樽出身の島田元太郎はロシア人と共同で島田商会を設立して漁業の他にも幅広く事業を展開した。当時のニコラエフスクには数多くのユダヤ人も居住していて街の経済に大きな影響を持っていた。親日的なユダヤ人と

日本人は気心が通じて、ニコラエフスクの経済発展に大きな役割を担っていた。

在留邦人が多くなったニコラエフスクには日本領事館が置かれた。日本人はニコラエフスクを「尼港」と呼んでいた。尼港はロシア人のほかユダヤ人、日本人、朝鮮人や中国人も多く居住している極東の国際都市であった。



ニコラエフスク・ナ・アムール市の博物館

ニコラエフスク博物館の歴史展示コーナーにいる。まず目についたのは、島田元太郎や島田商会の資料や写真が壁一面に展示され、ショーケースの中には茶碗など日本人が使っていた日用品がある。ひと際目立っていたのは立派な金無垢の仏壇だ。

エレナ館長は私を反対側の展示室に案内した。そこにはニコラエフスクにあった日本領事館のプレートと1917年に副領事として赴任した石田虎松さんの仲睦ましい家族写真があった。1920年そんな石田副領事一家は尼港事件の犠牲となった。

尼港事件は1919年から1920年にかけてロシア革命後の赤軍パルチザンによってニコラエフスクの全住民の半数に近い約6,000人が虐殺された事件である。この中には居留していた数百人の日本人と駐留していた旧日本軍の兵士約400人がいて全員犠牲となった。

1917年ロシア革命で帝政ロシアは倒れ、ロシアは内戦状態となった。1918年、革命軍によって囚われたチェコ軍を救出する名目で、日本、イギリス、フランス、イタリア、アメリカ、カナダ、中華民国の連合軍がシベリアに共同出兵した。いわゆるシベリア出兵である。



ニコラエフスクの博物館に展示されている
「日本帝国領事館」のプレートと
石田副領事一家の写真（上）
かつて領事館が建っていた場所（右）



旧日本軍はウラジオストックを拠点にしてシベリア各地に派兵した。ニコラエフスクにも旧日本陸軍の守備隊が駐留して治安維持を行っていた。赤軍パルチザンは事前の協定を無視してアムゲン川が結氷して孤立状態となったニコラエフスク市街地に侵攻。約4300人の武装兵で無差別攻撃を行った。ニコラエフスクを支配した赤軍は、資産家の財産を没収、銀行や公共施設などを抑えた。

尼港事件で守備隊が壊滅し、滞留法人が虐殺されたことで、旧日本軍は報復として北サハリンに侵攻した。かねてより北サハリンの油田を欲していた軍部はこの機を逃さず動いたものと考えられる。

1920年北サハリンを占領した旧日本軍は、サハリンの古都であるアレキサンドル・サハリンスキーに司令部を置いて、この地を亜港と呼んだ。



アレキサンドル・サハリンスキーに残る
旧日本軍の棧橋

当時の亜港に祖父と母が暮らしていたWさんの話を聞いた。南樺太に暮らしていたWさんの祖父は、軍部が亜港への移住者を募集しているのを聞いて応募したという。移住にあたっては軍部から家が1軒建てられるぐらいの支度金が支給されたそうだ。

亜港には三菱などの財閥企業も進出していて、Wさんの母親は三菱が経営する炭鉱事務所の

経理の仕事をしていた。街の主な通りは「三笠」など軍艦の名称で呼ばれていた。亜港には日本人町が出来て、小学校も開校していたという。1925年日本政府はソ連政府と和解、日ソ基本条約が締結された。旧日本軍は石油利権だけを残して、北サハリンから全て撤収することになった。日本政府は1926年国策会社である北樺太石油株式会社を発足した。この石油利権は1945年の終戦まで効力が続いたが、1931年の満州事変以後の激動する時代の中で本格的な採掘には至らなかった。

ソ連が解体された1990年代になって、ロシア政府は北サハリンの石油開発に外国資本の導入を決定した。日本の大手商社も欧米の石油メジャー資本と共に参画、いわゆるサハリンプロジェクトである。

ウクライナ戦争後も北サハリンで採掘された天然ガスは、パイプラインで南サハリンにある天然ガス液化プラントまで運ばれている。現在、ここで生産されたLNGの多くは日本に発電用として輸出されている。



サハリン南部ブリゴドノエにある天然ガス液化プラント

エレナ館長が「あなたはニブフの踊りを見たいですか」と聞いてきたので、是非見たいと答えた。私たちは博物館を出て隣接する図書館に移動した。図書館には小さなホールがあって、そこに案内された。ホールの中央には椅子が数脚置かれていた。エレナ館長が「どうぞおすわり下さい、踊りが始まります」と言うので、中央の椅子に腰を下ろした。まるでホールを独り占めしているかのようだ。

やがて独特の音楽が鳴り、正面奥の扉が開いた。北方少数民族伝統の文様を施した美しい民族衣装を纏ったニブフの娘さんが3人軽やかに飛び出して来た。エレナ館長は「ニブフに伝わる伝統の踊りですよ」と説明してくれた。踊りのことは全く不得手な私ですが、ニブフがアムール川と共に生きてきた日々の暮らしが表現されているのではないかと想像した。



ニブフに伝わる踊りを披露してくれた娘さんたち

ニブフの娘さんは3曲の踊りを披露してくれた。最後の踊りは、平たく円い太鼓を持った踊りだ。とても賑やかで、喜びが溢れているのが伝わってきた。アムール川の恵みに感謝する踊りではないのかと勝手に解釈しながら観ていた。

踊りが終わると9人の子供たちが舞台上に登場した。子供たちは民族衣装を着て、頭には手作りの熊やオオカミ、鮭などの面をかぶっている。エレナ館長が「ニブフに伝わる物語ですよ」と教えてくれた。なるほど、子供たちが演じているのは動作から森や河で動物たちと共に生きるニブフの暮らしであることが良く分かった。

アムール川の河口近くにニブフの村があるというので訪ねることにした。ニコラエフスク・ナ・アムーレは河口から80kmほど内陸の河岸にある。ニブフの人々が多く暮らすオーレミーフ村はニコラエフスクから60kmほど河口に向かった所にあるという。

私はエレナ館長の案内でオーレミーフ村を目指した。アムール川沿いの道は未舗装で、所々に橋のない小川を水しぶきあげて車で渡る。車内では身体が上下左右に揺れ、まるでオフロードコースを走っているかのようだ。車窓か

ら見るアムール川の景色は雄大で、遠くに貨物船やタンカーがゆったりと動いている。

しばらく走ると、大規模な定置網の設備が見えて来た。河岸から数キロ沖合まで立杭が並んでいる。近くで見ると杭には横板が敷かれていて漁師たちが忙しく行き来している。鮭漁の最盛期なのだ。川岸には力尽きた鮭が多数見える。

かつて、ニコラエフスクに暮らした多くの日本人もこのアムール川で鮭漁に従事してきたことを思った。今も昔も豊かなアムール川は、人々の暮らしを支え続けている。間違いなく未来永劫に人と共にある悠久な流れは途絶えることがないであろう。

私たちを乗せた車が走っているアムール川沿いの道が途切れた。左側に森に入る道があった。私たちはその道を300mほど進んだ。森が開けてなだらかな谷あいには木造の家々が並んでいる風景が目飛び込んできた。オーレミーフ村だ。

車を降りて村の道を歩いた。人の姿はない。各家は柵で囲まれている。外から柵の中を覗くとジャガイモや長ネギのほか葉物野菜が栽培されている。どの家も番犬を飼っているようで、柵に近づくと甲高く吠える。1頭が吠えると呼応するように隣の番犬も吠える。静かな村に犬の鳴き声だけが響いている。



ニブフが多く暮らすアムール川河口近くのオーレミーフ村

犬の鳴き声を聞きつけてスラブ系の顔をした初老の女性が家から出て来た。ズラーストヴィチェと挨拶。女性は何か用かと不審そうな顔つきをしている。通訳のインナが「日本から来た私の友人で、ニブフの村を見たいということでここに来た。もし良ければ中を見せてほしい」と伝えた。女性はにこやかな顔で、どうぞと私たちを柵の中に招き入れてくれた。

私たちは、母屋の隣にある窓枠が青く塗装された家に案内された。そこは自慢のバーニャ（ロシア式サウナ）だった。サウナ室は畳2枚ほどだ。隣に休憩室があって、椅子とテーブルが置かれ、美しい植木鉢が並んでいる。

案内してくれた女性は「ここは、自分たち家族や友人たちと楽しくくつろぐことができる最高の場所」と説明してくれた。私がこの村にニブフは何人ぐらい暮らしているのか聞いた。彼女は村の人口は約200人で、そのうちニブフは30人ほどだと答えた。日中は仕事に出かけていて村にはいないとのことだ。私たちは自宅に招き入れてくれた女性にスパシーバとお礼を言って村を出た。

私たちは再びアムール川沿いの道に出た。私はエレナ館長にアムール川の河口に行きたい旨を伝えた。エレナ館長はここから河口までは20kmほどあるが道路はないとの返事であった。私はここからアムール川の河口を遠望することにした。

私は車から降りてアムール川の岸まで歩いた。

岸辺から河口を見ると薄っすらと青白い島影が見えている。私は思わず「サハリンだ！」と叫んでいた。間宮海峡は狭い海で最狭部は5kmにも満たない。私の立つ地点からサハリンまでは25～30kmほどであろうか。

1809年アムール川を下った間宮林蔵も同じ景色を見たのであろうと想像した。サンタン交易で江戸に運ばれた蝦夷錦もここを通過したに違いないとも思った。15世紀半ばから17世紀半ばまでの大航海時代、ヨーロッパの列強国は5大陸はじめ地球全体をほぼ知ようになった。こうした中で極東の一部、つまりサハリンを含む周辺地域だけは未知の世界であった。19世紀に入り、間宮林蔵によりサハリンが島であることが確認された事実がヨーロッパに伝えられたことで世界地図にアムール川とサハリン島が正確に掲載された。

サハリンの語源については定説がない。満州語の「サハリヤン・ウラ・アンガ・ハタ（黒竜江の対岸の意）」とも中国清代に呼ばれた「庫貢島（クーイェダオ）」がキリル文字になると「サハリンダオ」のロシア語発音からきたのではという説もある。

日本はサハリンを江戸時代は「北蝦夷」と呼び明治に入って「サガレン」その後はアイヌ語の「カムイ・カラプト・ヤ・モシリ（神様が黒河の河口に造った島）」から「樺太」と呼んできた。

今、私の眼前にはアムール川とサハリン島が一体となった語源通りの風景があった。



アムール川の河口付近からサハリンの島影を望む

遙か遠いモンゴル高原で滴った一粒の水が、長い時間を経てユーラシア大陸の東で幾多の川と合流して今この時、海に出ようとしている。この流れは人種や言語そして時代を超えて流域に暮らす全ての人々の糧となって来た。

アムール川は流域だけでなく海を越えて暮らす我々にとっても大切な恵みの川である。私たちは未来に生きる人たちにアムールの悠久の流れを残さなければならない。上流に暮らす人は下流で暮らす人を、下流で暮らす人は海で暮らす人を、そして海で暮らす人は対岸で暮らす人

を思いやらなければならない。

アムール川の旅は終わった。

私はニコラエフスク・ナ・アムーレの空港からハバロフスク空港行きのYak40(ヤコブレフ・ソーラク) ソ連時代の32人乗り旧型プロペラ機に後部のハッチから乗り込んだ。まもなくYak40は、鼓膜を破るかのような爆音を轟かせて離陸した。あいにくの曇り空だ。Yak40の窓の外には長大なアムールの悠久な流れが果てしなく広がっていた。



ニコラエフスク・ナ・アムーレの上空から見たアムール川

《参考文献》

- ・相原秀起『追跡 間宮林蔵探検ルート』北海道大学出版会、2020年
- ・赤羽榮一『未踏世界の探検 間宮林蔵』清水書院、2018年
- ・秋月俊幸『日露関係とサハリン島』筑摩書房、1994年
- ・麻田雅文『シベリア出兵』中公新書、2016年
- ・アントン・P・チャーホフ（原卓也訳）『サハリン島』中央公論新社、2009年
- ・岩下明裕「中口国境秘話」日本対外文化協会編『第2回日口学術・報道関係者会議「北東アジアの発展と安定」報告集』、2005年
- ・V・K・アルセニエフ（安岡治子訳）『デルス・ウザラ』小学館、2001年
- ・菊池慶一『ドキュメント流水来る！』共同文化社、2000年
- ・木村 汎『日露国境交渉史』中公新書、1993年
- ・佐々木史郎『北方から来た交易民―絹と毛皮とサンタン人』NHK出版、1996年
- ・白鳥正明『シベリア出兵90年と金塊疑惑』東洋書店、2009年
- ・橋本捨五郎『会津藩、ロシアに対峙す』福島民報社、2008年
- ・藤原 浩『シベリア鉄道』東洋書店、2008年
- ・間宮林蔵述・村上貞助編『東韃地方紀行 他』平凡社、1988年
- ・細谷千博『シベリア出兵の史的研究』岩波現代文庫、2005年
- ・洞 富雄『間宮林蔵』吉川弘文館、1986年
- ・前嶋信次『日持上人の大陸渡航』誠文堂新光社、1983年
- ・松田伝十郎「北夷談」高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成 第4巻 探検・紀行・地誌 北辺篇』三一書房、1969年
- ・三浦清美『ロシアの思考回路』扶桑社新書、2022年

Traveling on the Amur River

Masayoshi Saito

Visiting Researcher, Research Institute of Social System
Chuo Gakuin University

Abstract

The Amur River is a large river that flows from the Mongolian plateau through the plains of China and Russia, and then pours a large amount of nutrient-rich water into the Sea of Okhotsk from the Mamiya Strait. The water, which seems to have gathered all the nutrients of the Eurasian continent, eventually reaches the shores of Japan as ice floes. This essay is based on my personal experience of traveling on the Amur River for a long time.